

# 研究資料

## キリシタン関係銅版画

菅野 陽

### 一 伝来の彫刻銅版画

十六世紀半ば以降日本に齎らされた宗教銅版画のうち、その総数の何百分か、何千分の一かの極めて僅かな点数が日本の各地に現存している。その点数はそれでもなお当時日本人が制作したことが明かな宗教銅版画遺品の約四倍にあたる。それらの所蔵場所、点数は次に示す通りである。そのほとんど大部分のものはすでに幾回も陳列展観されたり、各種の美術全集、研究書に取りあげられ、写真版で紹介されたものもある。しかし所蔵品リストに入っていないながらその実物について今日まで紹介されていないものも次の目録には入れている。

#### 現存伝来宗教銅版画一覧

- |             |              |     |
|-------------|--------------|-----|
| 1 水戸彰考館     | イ 西洋銅版画帖 一冊  | 四九点 |
|             | ロ デウス十誡 卷子本  | 三点  |
|             | ハ 聖ドロテア 木枠入  | 一点  |
|             | ニ 聖霊降臨 着色    | 二点  |
| 2 東京国立博物館   | 西洋銅版画        | 十九点 |
| 3 神戸市立南蛮美術館 | イ 教会暦 十二か月貼込 | 一点  |
|             | ロ 銅版画入聖牌 三種  | 五点  |

キリシタン関係銅版画

4 個人所蔵 イ 天使讃仰図 高槻 東家 一点

同 大神家 五点

ロ 使徒信経図解 故勝俣詮吉郎氏旧蔵 一点

鎖国以後の伝来品と考えられるもの

5 大阪南蛮文化館 聖アンドレア 一点

6 東京国立博物館 銅版布製スカプラリオ 一三点

7 長崎市(島原城資料館常陳) 凸版用金属原版 一点

以上のうち今日まで紹介されていなかったものは1のハ、3のロである。1

イ『西洋銅版画帖』はとりあげられることが多いわりに内容について正確な紹介は少ない。<sup>註1</sup> 1のニは日本人作と見做して私は述べたことがあったが、<sup>註2</sup> 改めて伝来品として記しておきたい。2の作品の多くに刊行者等のサインが明瞭であるのでサインごとに整理してみた。なおその中の一点は日本人作と私は見ている。5も紹介の度合いは少なかつたと思われる。7は昭和四年「耶蘇

会出版に用いたる古銅版」として写真版で紹介されて以来、日本人作と見る説が多いが、<sup>註4</sup> 私は敢えて伝来品の中にいれた。以上の順にそれぞれについて明らかにし得たことを述べ、他は今日までに書かれたものに譲ることにしたい。

1 ハ 聖ドロテア

(図版9a)

挿図の挿本五原立郎 水戸彰考館蔵

挿図1 聖ドロテア

水戸の旧徳川藩の押収したキリシタン関係の遺物は司祭の祭服、ミサ用の聖体布、十字架上のキリスト像などの他にこまごましたロザリオや小さな鉛の十

字架、書物、そして前記した銅版画等、全部で七四種が彰考館の目録に挙がっている。その中に翠軒立原甚五郎が寛政十二年（一八〇〇）に書いた写本があり、<sup>註5</sup>それには押収品の図も入れてある。それによってこれらの遺物の由来が判るが、「聖ドロテア」の銅版画はその挿図（挿図1）にもはっきりと描かれている。

#### 吉利支丹法服諸器物

此品何年何人の物なることをしらす 此邪宗門嚴禁の初犯人を罪に処せられ其遺物没収せられたる物と見えたり 本尊の下札に作左衛門とあり 又帷帳のとき物にも下札有て七左衛門分とあり 又写本の内一冊の末に元和四年（一六一八）拾月五日とあり 又一冊の末には寛永五年（一六二八）正月日とあり おもうに此年月の比 作左衛門七左衛門など、云へるもの伝へたるものなるへし 久しく評定所闕所物の内に雜へて庫中に蔵め破損せるもの多し 書籍の散落せるもの綴立て置へしと嘗て御奉行の命あり 今茲工人を催して評定所に至り町与力の衆に告て是を出さしめ 背装修補せしむること三日にして功を終りぬ 且品目の目録略図を記して箱に入れ他日の検閲に備ふといふことしかり

寛政十二年庚申六月廿九日

立原甚五郎識

手垢のしみこんだような木枠（竪六・二横四・ハセンチ）には薄い経木のふたがついているが、それは後につけたものと思われる。なぜならば木枠には銅版画の下辺中央に窪みがつけてあり、画の縦の両側には本蟻に彫ったみぞがあり、上辺はその溝の底辺と同じ高さにしてある。おそらく枠と同質の板をそのみぞにはめ、窪みに指先を入れてその板の蓋を押し開けたに違いない。そして常時携帯し、随時礼拝していたものではないだろうか。

彼女は容姿の美と篤信とで有名な三世紀のキリスト教信者の少女であったが、棄教を強制する支配者によって拷問にかけられ、処刑された。その時期は二月であったが、その刑場に一人の天使が三つのばらと三つのりんごを持って現れたという。<sup>註6</sup>図の右下にしているのはその天使が三つの林檎（そのうしろ側にあるのはばらだろうか）を捧げている。また右手に持つのは殉教者のしるしである棕

櫛の葉である。ふくよかなドロテアの表現や迷いのない適確な彫刻線の使い方によって、これがヨーロッパ製であることは疑いない。

### 3口 銅版画入聖牌

昭和三十年五月発行の池長孟氏の書いた『南蛮美術総目録』は神戸市立南蛮美術館の所蔵品目録であるが、その第二十一章が切支丹物とある。三項に分れその第一項に「福井地方某医家伝来品」とあって、

この蒐録品は、林若樹翁の旧蔵せしものにて、もと越前福井の某医家の仏壇裏にかくされたものなりという。林翁の記録も遺らず、詳細を知り難きは遺憾なり。

と書いてある。同館の「教会暦」や東京国立博物館の二〇点も同じ福井の某医家のものであった。幸田成友氏は『史話南と北』（昭和二三年刊）の中で、林氏の直話というのを紹介しておられる。それは昭和十六年の講演であるが、

その旧家といふのは代々医を業とし、南蛮流の葉を売つてゐたさうで、氏は本と同時に多数のメダル、銅版画、紙石盤のやうな小さな手帳、その外、色々な品物を買はれた。メダルには名を書いた紙片を結附けたのがある。林氏は前後二回は是等の貴重な遺物を買はれたさうで、委細は後日必ず書くと言明して居られたが、遂に何も書かない内に歿してしまはれた。

そして林氏に頼まれて買入方を紹介した山中笑という老人もなくなったので、今は聞きに行く所もない、と述べ、さらにその旧家では代々親から長男に洗礼を授け、その時に遺物を拝ませるだけで、平素は仏壇に隠してあった、という林氏の直話をつけ加えておられる。同館の総目録には三三六頁上段に

#### ◎メダイ?

聖像の小さき絵画などを、布裂地に収めて裝飾を施し、極めて薄き硝子を張りたる品など。記念牌 *locket* 式のものなり。今の教会にはあまり見受けざるが如し。

と解説し、明らかに銅版画入と書いてあるものは次の三点である。

10◇聖難銅版画入 聖牌（図版8a）

11◇キリスト像銅版画（着色）入 聖牌（図版8b）

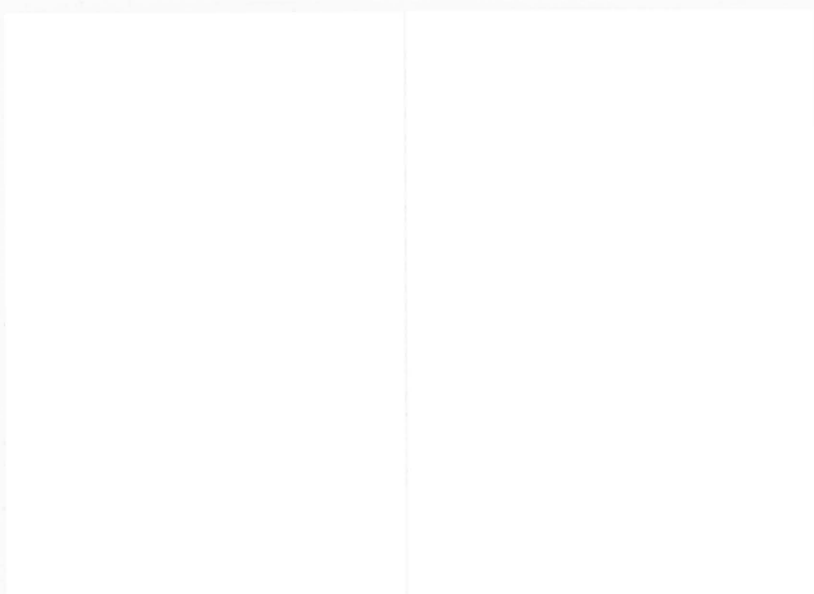
12◇両面使徒像銅版画(着彩)入 聖牌(図版8c)

実際に閲覧したものはさらに一点多く(図版8d)四点であった。

10は銅版画をおおっている薄いガラス板が破れている、キリストの笞刑の彫刻銅版画(長径二・七短径一・九センチの楕円形)で、彩色してない。中央のキリストの小さな鼻、耳の形の拙さ、立体感表現とも見えない腕や腹部の横に引いた平行線、禪のような下帯、円光や頭髮、二人の兵士の不明瞭な姿勢やその立体感表出の拙さはヨーロッパ伝来品ではなく、日本人信徒の画学生の作品と見做し得る素朴なエングレーヴィングであり、裝飾容器も日本製であろう。

11のキリスト像は桐箱に収めてあるが、ガラス板はなく、裝飾の金モールの枠から銅版画とそれを載せている受け台となっている布地を貼ったボール紙とはずくはずれて別べつになるような状態であり、写真版で見られる通り胸部に大きな虫喰いの痕がある。大きさは楕円の長径二・七、短径は二・二センチあり、四点の中では最も大きい。柱に体を寄せたキリスト像であるが、柱の左、キリストの顔の高さに腕のようなのが見える。おそらく十字架を背負わされ、右手でそれを支え、刑場に向う場面のキリストの半身像であろう。直交する他の一本は円光の中にあるためかはっきり表現されていない。キリストの鼻梁を一本の縦の線で表現した点は東洋風とも見えるが、両眼の立体的な表現や動感のある姿勢、身体や円光の線の無駄のない彫刻線は熟練した彫版家の作品のようであり、将来品と思われる。着色は具入りの水溶性顔料のようであり、着衣の赤(多分に胡粉が入っている)、顔面に点々とつけた赤は荆冠のため落ちる血を表わすものか、その彩色は日本人のつけたものであるかも知れない。

12の両面使徒像銅版画入聖牌というのは気泡の入ったガラスで裏裏両面とも現在もしっかり蔽われていて、それを透して銅版画を見るほか方法がない。大きさは極めて小さく、やはり楕円形であり、長径一・六短径一・三センチでほぼ拇指の爪か、それより少し大きい位である。一面は(挿図2右)若く百合の花を持ち、頭の中央は一本の線で丸く表わしてある。あまりはっきりとは判らない

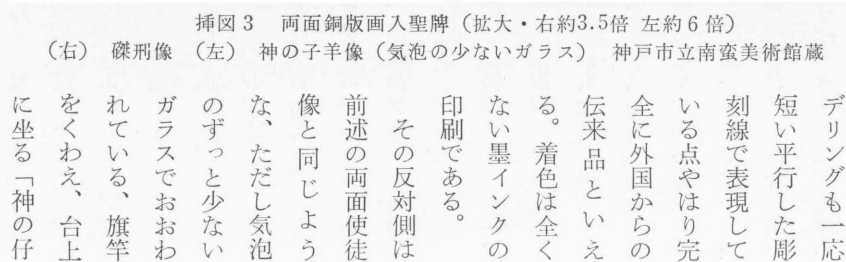


挿図2 両面使徒像銅版画入聖牌(拡大・約10倍)  
(右) 聖ドミニコ (左) 聖フランシスコ 神戸市立南蛮美術館蔵

がドミニコ会の修道会服をつけていると思われるので聖ドミニコであろうか。他の一面(挿図2左)の聖者はやはり頭の中心は丸く、有鬚でやや右を向いている。組んだ両手の甲には聖痕が現われ、左手で十字架を持っている。やはり修道会服を着ているが、頭巾を耳

のうしろまで被っている。この方は聖痕と十字架から聖フランシスコと見てよいだろう。小さな画面であるが、要約した彫刻線で敬虔な雰囲気をも描出している。(ただし表題に両面使徒像としたのは前記『総目録』による。)

以上のほかの一点も両面に銅版画を入れた聖牌であるが、下げ紐はすでに失くなっていて。一面にはガラスはなく、大きさは前のものより少し大きく、長径一・九短径一・五センチの楕円形に十字架にかかるキリストの全身像とその前にそれを見上げる円光のうかぶマリアが膝をついているように見える。拡大(挿図3右)して見ると彫刻線はしっかりしていて、平行線あるいはクロスハッチで暗部をあらわし、キリストの裸像の形態のデッサンは多少おかしいが、モ



挿図3 両面銅版画入聖牌 (拡大・右約3.5倍 左約6倍)

(右) 磔刑像 (左) 神の子羊像 (気泡の少ないガラス) 神戸市立南蛮美術館蔵

デリングも一応短い平行した彫刻線で表現している点やはり完全に外国からの伝来品といえる。着色は全くない墨インクの印刷である。

その反対側は前述の両面使徒像と同じような、ただし気泡のずつと少ないガラスでおおわれている、旗竿をくわえ、台の上に坐る「神の仔

羊」像(挿図3左)である。大きさは反対側の磔刑像より小さく、長径一・五短径一・一センチのやはり楕円形であり、旗のそばに赤く着色し、台のあたりは緑色がおいてある。要約的な彫技であるが、水平の平行線で巧みに処理して小画面をまとめあげてある点、また仔羊の円光の扱いは手慣れた表現である。これもまたヨーロッパ製であろう。

以上の六点の銅版画は水戸の「聖ドロテア」と同じように、収蔵目録に載っていないが紹介されたことのなかったものである。「キリストの笞刑」一点のみ画面構成、人物の形態描写そして彫版技術の点に於いて他の五点より明らか

に劣り、日本人作と考えられるので、後述の日本人制作リストに入れる。

### 1イ 西洋銅版画帖

彰考館の目録の控えには『カトリック要理』(ラテン語)となっている。そして「大きさ縦一八・二センチ、横一三センチ、厚二・三センチ、一五七三年製、絵四九枚、白紙二七枚、表紙 板にビロードを張る、カロロ・ボロメオ著 金具にて閉る」とある。しかしカロロ・ボロメオはこの書を献げられた枢機卿である。また白紙は見返しを入れて前に三枚、後に二四枚ある。後の白紙には銅版画を貼ってあったことが判るページもあるが、それらについては後述する。

献辞のある最初のページの下部に「ペトルス・パウロ・パロンブ・ノヴァリクス 一五七三年 ローマにて刊行す」とある。パロンブはブライアンの『画家版画家辞典』<sup>註7</sup>によれば、ナヴァラルの版画家、十六世紀の半ば頃ローマに住んでいた、と簡単に記載してある。そして彼の銅版画の中に次のものがある、として挙げているのは五点であるが、ラファエル原画「最後の晩餐」、同上原画「聖家族」、ミケランジェロ原画による次の三点「埋葬」「磔刑」「素描教室」。以上によって彼は当時の複製銅版画家であり、扉に見るように「銅版画帖を刊行した」ということから版画家も兼ねていたと考えられる。銅版画の画風は丈の高い人物たちの身長割には顔が小さく、姿態のそれぞれは概して女性的な風情が見られる。その特徴はマニエリスム流のものである。彫刻銅版画の技術は相当巧みではあるが、当時の第一級のものではない。パロンブのこの「キリストの生涯」の最終の番号は四三であるが、次に示すように紛失したページは始めの方に多く、また他の箇所にもあり、全部で三七点が現存している。

左開きのこの銅版画帖が研究の対象として興味のあることは、その物語りの銅版画にあることは無論のことだが、それらは各ページの表面に刷りこまれ、裏面は白紙のまま、その後のページの表ページに糸で綴じつけた版画がさらに十二点あること、その上その後ろにある二四枚の白紙には銅版画を貼った糊

着けの痕を認めることのできるページや、剝がした後に銅版画の極く小さな一部が残っているページが一枚だがあることなどによる。始めにキリスト画伝のそれぞれの画の下にラテン文で聖書の句の通りではないが、画と関連した言葉が彫刻してある。それらは一、二点を除いては紹介されたことがないので、和訳したものを順を追って記すことにした。ラテン文の和訳は安田悦子氏の御力添えによるものである。上の数字は始まりの見返し一枚、版画を刷ったページと同質の白紙二枚を除いて扉ページを1とし後の説明のための通しナンバーであり、ローマ数字はキリスト画伝に刷ってある番号である。

1 扉ページ 図の上部に IHS とあり、中の大文字ばかりで書いてあるのは、最下段に IOSVE とあって旧約聖書ヨシユア記第一章の八節が抜粋されている。

この律法の書をあなたの口から離すことなく、昼も夜もそれを思い、そのうちにしるされていることをことごとく守って行わなければならない。そうするならば、あなたの道は栄え、あなたは勝利を得るであろう。

とある。その下の囲みの中のイタリックの文字の訳は次のようになる。

もつとも著名にして尊敬すべき聖ブラクセディス教会の至聖なる司祭である枢機卿、内赦院長にしてミラノの大司教、常任司教代理役、ポルトガルとフランドルの守護者であるカルロ・ポロメオ枢機卿に捧ぐ

さらに下の小さな文字は前出の

ベトルス・パウロ・パロンブ・ノヴァリクス 一五七三年 ローマにて刊行す

四〇枚以上の銅版画シリーズでキリストの生涯を扱ったものはホルスタインの『オランダ、フランドルの版画辞典』<sup>註</sup>を見ると、いく通りもの組み方が十五世紀の中葉からすでに制作されていたことが判る。水戸のシリーズではVから始まっており、I~IVまでの四枚が欠けている。他のシリーズを参考に考えればVが「エジプトへの逃避」であるので、「受胎告知」、「エリザベト訪問」、「誕生」、「羊飼いの御告げ」、「マギの礼拝」、「神殿への奉献」のどれかが欠けた

四枚に入ると思われる。V以下のラテン語は次の通りである。

2 (V) 貧しいロバに揺られて、聖母マリアは幼な子を抱いて、エジプトに逃げて行きます。

(VI-X) 六番目に何がくるかちょっと判り難い。五七枚シリーズでは「エジプトへの逃避」と「博士たちに囲まれたキリスト」は続いているし、四六枚シリーズでは「聖ヨゼフ働く」となっている。ここでもそのような図柄があったのかも知れない。

3 (III) 博士たちよ、この幼な子の賢さは驚くべきことだとは思いませんか、当然のことではありませんか、この幼な子は神の御子なのですから。

4 (III) 注がれる水がキリストを浄めるのではなくて、キリストは神の御旨によってその水に浄められるのです。

5 (X) 全能の神に戦いを挑んだ悪魔は、打ちまかされて地獄の暗闇の中に消え失せます。

6 (X) キリストは水を葡萄酒に変え、初めてみずから神であることを証明します。

(XI-X) 「中風者の治癒」がくるのだろうか。

7 (IX) 御神は神のような容貌を持ち、雪のように白いお召物は輝く太陽のようでありました。

8 (XIII) 人々の憩の源である御方が水の湧きでる井戸辺に憩んでおられました。ほとぼしる水に満てる洗礼盤が彼に水を要求します。

9 (XIII) キリストは怒りに燃えて、神の鞭を持ち、愚かな貪欲な人びとのささげ物を打ちくだされる。

10 (XV) 主なるキリストは歩みのおせいロバにまたがっておられます。人々は喜び勇んで彼のために衣服を、枝(シコロ)を地に敷きます。

11 (XVI) 宴会の終わった後で、キリストは召使のように前掛をひいて川の水で友人たちの足を洗います。

12 (XVII) キリストよ、会食者たちのために食物と飲物になるように。あなたの血と肉は私たちにとって美酒であり、美味な食物なのです。

13 (XVIII) キリストよ、あなたは恐れおののき、汗を流し、祈って敵に身をさらしておられる。どうして弟子たちと共に、深い眠りが私を捕えるのであろうか？

14 (XIX) ヌダは接吻をします。ペトロはマルクスの耳を切り落します。不敬な人々の群はキリストに手をかけます。

15 (XX) キリストはアンナのところに、そしてカイファの家に引かれて行きます。不敬な兵士たちは一晩中彼をのしります。

16 (XXI) ヲロテのところ连接到れてこられたが、キリストが何も答えないので、上着を着せられて、嘲り笑われ、外に追ひ出されます。

17 (XXII) 憤った人びとは縛りあげたキリストを大司祭の家に連れて行きます。そして偽証人による偽りの罪を承認させようと準備します。

18 (XXIII) 無実のキリストは、鞭や縄を受けるに値するどんな罪を犯したというのでしょうか？

罪人である私こそ縄や鞭を受けるにふさわしいのです。

19 (XXIV) 王のなかで最高の王よ、あなたはこの不当な冠をかぶっています。

この冠は私の罪にこそふさわしいものなのです。

20 (XXV) 「この人を見よ」と司法官よ、あなたは言いました。不敬な人々の群は何の心も動かされませんでした。

「ここに神を見よ」と言いなさい(あなたはおそらくひざまずくでしょう)。

21 (XXVI) キリストよ、あなたの情熱があなたの十字架を負わせることになりました。どうして私は私の十字架を負うことを止めるのでしょうか？

22 (XXVII) 十字架は疲れ果てたキリストを受け、釘は御手と御足を裂き、地は聖なる血で染まっています。

23 (XXVIII) ああ敬虔と驚くべき大きな愛のしるしである十字架が立っている。

生命の創造主は罪人たちに生命を与えて亡くなられました。

24 (XXIX) 亡くなられたキリストは十字架からはずされず。生きながら十字架を降りることができたのに、私たちに對する大きな愛が、このような行為をするに至らしめたのです。

25 (XXX) ここでは御子の哀れな御身体を自分の胸に抱き、聖母マリアは聖なる傷を涙でお洗いになります。

26 (XXXI) 世の創造主は墓の中に身を隠されました。その方の中には人々の希望と救いがあるのです。

27 (XXXII) キリストは地獄の戸を砕き、悪魔を縄で縛り、長老たちを天国まで導きます。

28 (XXXIII) 死の勝利者であり、残酷な地獄の掠奪者がここにおいでになります。私はもう死と地獄の恐れを軽蔑しているのです。

29 (XXXIV) マリヤよ、もう泣くのをお止めください。イエスは復活なされたのです。あんなにも輝かしい光がお顔から溢れているのがお見えにならないのですか。

30 (XXXV) マグダラのマリヤよ、どうしてキリストが農夫になったのに驚いているのですか？

神であるにもかかわらず人になられたのだから同じことではありませんか？

31 (XXXVI) 女たちよ、恐れてはいけません。イエスは死にうち勝たれたのです。墓の中に彼を探しても無駄なことです。生きて墓からお出になってしまったのですから。

32 (XXXVII) 偉大なキリストよ、愛する主の死を悲しんでいる仲間たちを、あなたは道中慰めます。

33 (XXXVIII) 至福なるお傷に聖トマは手を触れ、直に王であり、私の神で



ある、と叫びます。

34 (XXXXX) 大理石の墓から出た後、キリストは三人のマリアを同時に訪れます。

35 (XXXXX) キリストは勝利に輝き、天に昇り、父の座に帰ります。どうして私たちは彼に従わないのでしょうか？ 天は私たちにとって確実な御国なのですから。

36 (XXXXX) 火が永遠の心に炎を燃やし、光が輝き、熱と燃えるように！  
(XXXXX) 「聖三位」「最後の審判」などが入るのだろうか。

37 (XXXXX) キリストは彼の王国の助力者として御母聖マリアを召され  
ます。

何という大きな栄光につつまれて、彼女は天使の群たちまで昇って行ったことでしょう。

以上でローマ数字を入れた一貫したキリストの画伝は終わっている。次のページから画伝とは一点を除いては全く関係のない銅版画、木版画が糸で綴じつけである。引き続き38から49までの番号を付けて説明する。それらの版画に見られる虫の喰った痕は綴じつけたページについている虫の喰い痕とは一致していない。それは他にあつたものを後の時代に持ってきたものと見做すことができる。その時期は初めに引用した立原甚五郎の文章にある寛政十二年の整理の時であつたかも知れぬ。十二枚のうちには本の挿画であつたものや、シリーズもの的一部と思われるものもある。前引の文章の後段「久しく評定所關所物の内に雑へて庫中に蔵め」以下から想像すれば、押収された版画類も永い年月庫の中に放置されたまま、虫の巢のようになり、その中から程度のよいものだけを撰び出してこの銅版画帖の空いているページに綴じつけた、とも考えられる。水戸徳川藩の押収した版画類は意外に数が多かったかも知れない。

38 キリスト生誕 木版画 画面の大きさ(カッコ内は紙の大きさ) 縦九・八  
(二〇・八) 横六・〇(六・三) センチ

面も同様である。したがってそれらの載っていた洋書が押収されていたのか、洋書から信徒の切り抜いた木版画がもっとあつたのかは判らない。この場合は整理に当る役人が前者のような面倒をするとは思えない。おそらく信徒が原書から切り取って所持していたものである。左側の切り取った線にかかって見える毛筆の字は信徒が書いた文字で、信徒の洗札名や祈りの言葉だったのかも知れない。このような例は東京国立博物館所蔵の福井発見の銅版画にも見ることができぬ。

39 縦八・〇(八・九) 横五・六(五・九) センチ 彫刻銅版画  
下の二行の文字は

挿図5 聖霊降臨 木版画 挿図4 キリスト生誕 木版画  
(裏面の文字を裏側から光線をあてて撮影したもの)

画面の周囲に文字はないが、この版画の裏側(挿図4)には黒の活字と所どころに赤の活字を交へた文章が印刷してあり、判読し難いが教義書か聖書物語などの類かも知れない。  
後出42の裏

聖ペトロ われは天地の創造主 全能の父なる天主を信ず

彫版、刊行者等のサインは何もない。この作風と同じと見られるものはこの綴じこみの中にはない。

40 縦八・八(九・六)横五・八(六・二)センチ 下の文字は聖フィリップ7とある。右端の7は使徒像シリーズの番号と思われる。したがってこの体裁の使徒像が他にも日本に来ていたかとも考えられる。ただし39とは別箇のものである。先ず文字の入れ方、シリーズであることを示す番号の有無等で判断できる。次に画像のスタイル、彫刻技法が異なっていることを指摘できる。

41 縦九・〇横五・八センチ 画面の上部、十字架の上に INRI の文字が見られる。画面の右下が著しく虫に喰われている。画面の周囲の二重線の外側にくらべて画面は茶褐色にやけている。この画面では円光を五角形にでもするつもりのものがうまくいかず、十字架の木の木理の表現の強さにして調子の変化がなく、下部の山、建物、ことに向って左側の山の巒の彫刻線の方向の拙劣さ、遠景の山々を一本の線で表わしてある点、キリストの顔、背景に全然線を使っていない、などの諸点、またこのポーズの磔刑の構図は踏み絵のレリーフにも共通性のある日本人信徒に馴染みの深い型の像である等の点を考え合わせると、この銅版画は日本人の作であるかも知れぬ。

42 38で述べたように、おそらく同じ本(挿図5)の挿画木版画であったと思われる。聖霊降臨の図である。その教義書をはじめは外国人宣教師の所持品の一冊でもあったのだろうか。十六世紀後半には書物の中の挿画は銅版画が圧倒的に多くなってくるが、ローマ・カソリックの圏内で使用するバイブル等の挿画には十六世紀末までは木版画が用いられたことが指摘されている。<sup>註9</sup> またシユッテ師がマルコ・フェラロの書翰を引用して、彼がクリシタンたちに見せた「主の一生について」の絵の本を、註で水戸の『西洋銅版画帖』のようなものであったかも知れぬ、としているが、<sup>註10</sup> こうした木版画の画伝を考慮に入れる必要があるのではないだろうか。なお水戸の押収品のうち、小さな聖体入れにも欧

文の印刷物や写本等を形なりに切り抜いて重ねて受け台に使ってある。

43 縦九・六 横六・四センチ 文字は聖マテオ

44 縦九・六(一〇・三) 横六・五(六・八)センチ 聖ヨハネ 画面の下左にローマ、右下辺にアントニウス、カレニアニウス、フェキットとある。この署名者については何も判らない。サイン通りとすればローマで作られたものだろうか。43、44の二点には表現技法の上から共通したものがあるが、ローマ製にしては形態のとり方、彫刻技法ともできの悪い方に属すといえよう。

45 縦八・二五(九・二) 横六・三(六・五)センチ 文字は「イエズスよ、殉教者たちの冠であり、清純な乙女たちの永遠の花である」

挿図6 最後の晩餐 逆版の模刻  
キリスト 絵伝 XVII

銅版画技術の高  
度さを示した作  
品であり、十六  
世紀の末か、む  
しろ十七世紀の  
始め頃の北方系  
のもののように  
ある。

挿図7 同右 キリスト 絵伝 XVII

46 縦四・八  
横三・九センチ  
文字はないが、  
聖母被昇天の図  
であり、大浦天  
主堂が現在所蔵  
している一六〇  
七年長崎刊の  
『スピリッアル



『修行』の七二頁裏に貼ってある挿画銅版画と同一原版から刷ったものである。貼りこんである挿画よりこの方が印刷状態はよく、画面の枠の外側の紙がひろい。挿画以外に独立した宗教銅版画として配布した一例と見做すべきものであるかも知れない。

47 縦九・〇(一〇・八) 横六・九(七・九)センチ 最後の晩餐(挿図6・7) これはキリストの生涯のシリーズXVIIの図の裏返し図である。画面は左右反対になっているが、下に書いてある文字は同文であり、逆文字ではない。つき合わせて比較すれば、この方が劣っており、文字の綴りで(下段、終りから三語目)一文字落としていたりしてXVIIの模刻であることが判る。

もしこれが日本人画学生の手になるものならば、一瞥した程度では宣教師の手紙にあるように、本物に劣らない、あるいはどちらが本物か判らない位、という讚め言葉に相当する作品といえよう。

48 縦八・〇(九・三) 横六・三(六・六)センチ 文字の意味は「イエズスの御心の甘美さ」である。

この形式のものは日本に現存するものの中にはない。技術的には45と同じ程度に見える。

49 縦十一・八 横九・〇センチ 文字はルカ伝第二章三五節からで

あなた自身もつぎで胸を刺し貫かれるでしょう。それは多くの人の心にある思いが、現れるようになるためです。

画像は聖母マリアと思われる。画面の右下に見える数字は1590と読める。

新村出、西村貞の両氏が、この銅版画帖に一五五五年の年記をもつものがある

ことを述べている。<sup>註11</sup>しかし他に年記のある銅版画はないので、おそらくこれの

ことだろう。画面左下に見える二段の文字は左側から虫に喰われているため始

めの字が見えないが、上はマルテン・ド・フォス インヴェニト(原画の意)、

下段はサドレル エクスキデット(出版の意)と読める。坂本満氏撮影の、これ

と同一原版による銅版画の完全なもの(パリ国立図書館蔵)によるとR、つまり

から番号を付ける。最後の73は見返しの紙で紙質が他と異なり虫喰いの後がよりひどい。

50、53、57、65、66、69、70には銅版画の糊着けしてあった痕が見られる。

痕とは矩形に黒っぽくインクの脂でやけたと考えられる形が残っていたり、図柄を示すように濃淡が見られるものもある。濃淡は当然インクの量の多寡を反映したものである。始めにも述べたがこの銅版画帖は左開きであるが、66、70の痕は他のページでは裏にあたる方に貼ってあったと思われる。66の裏の分は銅版画をはがした痕に、極めて小さな部分ではあるが、銅版画の画面が残っている(挿図8)。それを拡大して見ると舟と水面のようである。比較のために39

挿図9 彫刻銅版画—聖ペテロ 部分

現存する伝来銅版画の中では優れた作品である。以上の四九枚の銅版画の後、見返しの紙を入れて白紙が二四枚ある。説明の都合上それらに引き続いて50

挿図8 西洋銅版画帖 No. 66 裏部分

ラファエル・サドレルであることが判る。彼の生歿年は一五五〇一六一六年であるので、一五五五年の年記を入れることは有り得ない。ラファエルは支倉常長の全身立像を銅版画に作っ

の聖ペテロの向って左側の中景にある舟(挿図9)を出しておく。以上によっても失われた銅版画に多様なものが伝来していたことを察することができる。

1 ロ デウス十誡 卷子本

「デウス授かる十ヶ条の事」の巻き物の始めに

笞刑 縦三〇・六 横二一・一センチ

天使図 縦二八・三 横二〇・四センチ

荊冠のキリスト 縦二八・九 横一五・四センチ

銅版画としては比較的大版である。それぞれの損み方、古び方は三枚三様であってその状態は異なる。現在のような表装にしたのは前の画帖の糸綴じ分の銅版画のように後世改装したものであろうか。

笞刑 このキリストも兵士も同じような体格に作っており、背景等も粗雑な銅版画である。この図の右下にCとBをならべたように見える字が彫ってある。オランダの彫刻銅版画家で一五一〇年生れで、三〇年から五〇年代にかけて多くの宗教銅版画を作ったコルネリス・ボスという人がいる。ただしこの図の文字はこすれてよく読めずあまり慥かではなく、この人の作品とする決め手としては不十分である。三点の中では紙が最も明るい色をしている。

天使図 紙のやけ方というか変色がひどく、台紙の折れ目が強く入って飛び散りそうな箇所がある。天使の形態などあまり上手なデッサンではない。<sup>註12</sup>

荊冠のキリスト この図像は最も痛み方が甚だしく、銅版画を刷った紙は部分的に台紙からはがれてなくなったところがある。この図と同様の構図の稚拙な納戸神としてかくれキリシタンが伝承したものや、似た構図で上半身には衣服をまといないレリーフが礼拝の対象に使われたものがあるが、また踏絵に使われたものも残っている。<sup>註13</sup>

1 ニ 聖霊降臨 手彩色銅版画<sup>註14</sup> 縦四・八 横三・七センチの楕円形 二点

のような舌の形」をしたものは金泥で彩色してある。もう一枚の方は金色の空であるが舌の形や円光はやはり金泥で描いてある。使徒たちは薄緑色の服やガ



挿図12 聖霊降臨  
立原甚五郎写本の挿図



挿図11 聖母子  
水戸彰考館蔵



挿図10 御聖体入れ 水戸彰考館蔵

彰考館が整理した「切支丹法服並諸器物」という一覽表に楕円形小箱(黒うるしに十字架をあしらう)金時絵(聖霊降臨の絵付) 縦六・三横五・三高さ二・五センチ(挿図10)

御聖体入(病人が聖体拝領の時、司祭がこの中に御聖体を入れて運ぶ)

とあって、その容器の中に入れた画(図版9b)は同一原版から刷った二枚の楕円形の彫刻銅版画の裏面を貼り合わせたもので、それぞれを違った色調で手彩色してある。一枚は赤が基調になっていて、空間やマリア、使徒のある者のガウンを赤く塗ってある。マリアの冠り物は紺色で「天から火

ウンを着たり、橙黄色の服をきたものもいる。マリアは薄水色のガウンをかぶり、桃色の服を着ていて、前のものより落着いた感じの彩色である。前者の赤い方は絵具の層が厚く、彫刻線が絵具に押さえられて見えなくなった部分があるが、後者では彫刻線がよく見える。この彫刻銅版画の原画は判らないが、現存する従来の版画の同画題のもの（『西洋銅版画画帖』のまた綴じつけてある木版画42東京国立博物館の同画題の銅版画）とは構図が全く異なる。これを日本人作としたのは同一の銅版画二枚を異なる色調に塗って貼り合わせてあることは不足がちと伝えられている伝来品の同一のものを一人の信者が占有していることに對して疑問を感じたことや使徒たちの頭部のわりに身体の方が大き過ぎたり、手や指の形のおかしい点、彫刻技法の粗い点などから考えたものであった。しかし今回立原甚五郎の『吉利支丹法服諸器物目録略図』を点検すると、その十帖の表に聖ドロテアの図とこの漆塗容器の中に「聖母子」の画が入っている状態を写し、傍に「日本ノ子安観音ノ如シキリシタンの本尊マークデマリアト云」と説明している（挿図11）。そして十二帖の裏に楕円形の比較的細い飾り様の中に「聖霊降臨」の図が入ったものが描いてある（挿図12）。いつの時代に「聖母子」が紛失し、「聖霊降臨」の銅版画が飾り様からはずされて漆塗容器に移されたものだろうか。この十二帖裏にある略図によって伝来品と見る方が正しいと考えられる。前に日本人作として紹介したことを取り消し訂正するものである。

## 2 東京国立博物館所蔵銅版画 二〇点の中の十九点

この二〇点は今年五月に発行された同館の『図版目録キリシタン関係遺物篇』に写真版でのっているし、『キリシタンの美術』（昭和三六年宝文館発行）にも紹介されている。それらの銅版画には次のようにその製作出版者らの名前が判るが、それは十四点ある。頭文字を組合わせたもの一点、サインを欠くものは五点である。サインの後の ex, excu, excud, excudit は製作した、という意

のラテン語で、その版の出版者を示す文字であり、しかもその版の彫刻者としてしばし同一人であることが多い<sup>註15</sup>。これを今日でも「鑄者」とか「鑄」という漢字をあてた解説を見るが、この文字は「ほる・える」という意であり、前述のような「出版」という内容は全く含まない。「鑄」に相当する文字は sculpsi であろうか。出版、刊行などの漢字を使うべきであろう。また fecit の文字もサインの後に見られるが、版画の場合画家を指すだけではなく彫版者の場合もある。版画の出版者としては三人であるが、二人が五点づつ、一人は三点にその名が見られる。そのグループは当然イエズス会系の仕事をした人たちであるが、ほとんどがフランスで活動した版画家、出版者たちである。伝来銅版画としては最も遅い時期のものである。画題は同館が銅版画のそれぞれのマットに書きこんだもの<sup>註16</sup>を使った。

トマ・ド・ルー<sup>註17</sup>発行のもの 五点

1 I. N. R. I. (掛軸装) Thomas de Leu ex.

2 童形キリスト P. Firens<sup>註20</sup> (画面内)

Thomas de Leu excu. (枠外)

3 聖女ユスチナ Thomas de Leu ex.

4 聖女エッフェミア

5 ばらの聖母子 Thomas de Leu fecit et ex.

ルクレルク<sup>註18</sup>発行のもの 五点

6 I. N. R. I. (別図) I. le Clerc ex. L. Gaultier fecit<sup>註12</sup>

7 聖ニコラウス I. le Clerc excu. L. Gaultier fecit

8 放蕩息子 I. le Clerc excud.

9 聖ドミニコ I. le Clerc excud.

10 聖母貞潔十二徳図 I. le Clerc excud.

ニコラス・ド・マトニール<sup>註19</sup>発行のもの 三点

11 最後の晩餐 Nicolas de Mathonière excudit

12 聖霊降臨図 N. de Mathonière excu.

13 ラウレンチウス N. de Matho ex.

註22  
B. I. (画面内)

14 発行者のサインなく、画家もしくは彫版者のサインのあるもの 一点

15 聖イヤチンクッス I. Picart fecit

16 頭文字を組み合わせたもの 一点

17 聖バルトロメオ GHの組み合わせ 註23

18 サインのないもの 五点

19 十字架(聖霊降架図)

20 聖ベルナルド(掛軸装)

21 聖ヒアシントウス 別図(掛軸装)

22 審判の天使図

23 聖三位と聖家族

20の銅版画は彫刻技術はもとより、人体のデッサンの初歩さえできていない点、下のラテン語の不完全なことからこれも日本人の作品と考えられる。また画面の大きさは『スピリッアル修行』の扉画より少し小さく、挿画よりは大きい。日本人作の銅版画は大浦天主堂蔵の一枚ものの銅版画「セビリアの聖母子像」のような大きいものもあるが、その他のものは概して葉書大より小さいものの方が多かったことから考えてもこの作品が日本人の手になると思われる。したがって私はこれは日本人作のリストの方にいれることにする。

3イ 4イ、口はすでに論じられているので省略する。4の口は今日何処に所蔵されているのか審かではない。

5 「聖アンドレア」は出版者であるユステウス・ダンケルツの生歿年(一六三五一七〇一)から見て、鎖国以後の伝来品であり、その図柄と似た寸法で同様の体裁、同じ出版者による「聖パウロ」の模写が存在するが、その署名は「嘉永二年乙酉(一八四九)六月二四日 雷洲安田尚義写」とある。したがって

「聖アンドレア」の銅版画はその「聖パウロ」の原画になった銅版画とともに鎖国中に齎らされたものと考えざるを得ない。

6 銅版の原版を四、五センチ角の布に印刷した教会要具の一種、その二枚を紐でつないだものを信者が持っていた。これらの布は「スカプリア」とか「マリアの旗」ともいわれた。中の文字はフランス語である。浦上四番崩れ(慶応三年)の押収品と思われる。『東京国立博物館図版目録 キリシタン関係遺品篇』に「守裂」として十六点ほど写真版ででているが、中の三点は銅凹版ではなく凸版をスタンプしたものと思われる。註24

7 幼児イエズスと聖ヨゼフ 縦一二・一横八・四厚さ〇・二センチの凸版用金属原版。

シュールハンマー師はこれを増田廉吉編『長崎南蛮唐紅毛史蹟第二輯』昭和四年一月刊から引用した。その説明には「茲に掲げた古銅版は、其当時それら出版(キリシタン版のこと)の中に用いられた挿画の、銅版として今に遺れるものである。」としているが、何の根拠も示していない。今日までに明らかにされたキリシタン版の中にこれを使用したものは全くない。ヨーロッパで金属凸版の図像を使ったのは一四〇〇年代の後期からで、祈禱書や聖務日課書を大いに飾った。しかしそれは十六世紀の前半までの間のことであった。木版をウッド・カットというのに対してメタル・カット<sup>註25</sup>というが、二通りのやり方に分けられる。一つは金銀細工師の使う道具―彫刻刀やパンチで削ったり、叩いたりして窪ませる。その版を凸版刷りすると、彫った線や打った点は黒の上に白くでる。そして背景となる地は装飾的な菱形模様や点で充満する。そのためその刷ったものをドットド・プリントという。ドイツで多く使われた。このテクニクは十九世紀のビュウイックの木口本版との近似性を考えることができるが、ルネッサンス期に取り上げられ発展しなかったことにイヴァンは疑問を投げかけている。註26 少し遅れて一五〇〇年前後からフランスで行われたメタル・カットは黒っぽい画面のドイツ流と異なり、図像の輪郭線を黒くはっきり出した、全

体では比較的白っぽい印刷面のものであった。それは十八世紀末にウィリアム・ブレークが腐蝕で作ったような金属凸版であり、今日の写真製版の工程による金属凸版と似た凸版効果のものである。「幼児キリストと聖ヤコブ」の金属凸版は彫刻法で作ってあるが、ドイツ流のものではなく、フランス派のものである。しかしキリスト、ヤコブ、天使などの表情や姿勢、衣服の皺の表現、ことに画面に対して人物の歩いていく方向等の画面構成、あるいは天使たちの翼が正確な描き方ではなく、蝶の羽根のような表現になっているなど画風の点から前述したヨーロッパのメタル・カットの盛んだった頃（それらは主として宗教改革以前の時代であり、イエズス会が創立した時代より前であった）のものより時代が下がると考えられる。むしろスカプリオの齎らされた時代と同じ頃日本に持って来られたものであるかも知れない。画風や技法の点から日本人製ではないと考える。

## 二 日本人制作の彫刻銅版画

現存する当時の日本人製作の美術作品を列挙したのはシュールハンマー師の一九三三年の論文に見られるが、それらは「イエズス会による日本絵画学校の作品」<sup>註27</sup>の章にある。

この学校の作品は、ほとんど例外なく宗教的目的に奉仕しているものばかりであるが、十七、八世紀の迫害の時代にほとんど全部が破壊されてしまった。一点でも保存している場合、それは死を以て罰せられたのである。極く僅かの作品がそれでもほぼそと命脈を保ってきたのみであった。

そして油画、水彩画（洋風日本画、墨画も含まれる）を挙げた後、次のように銅版画を取りあげている。ただしそれは日本国内にあるものとは限らず、ヨーロッパに今日保管されているものも入る。ヨーロッパにあるものは一枚刷の独立した銅版画ではなくて、日本で刊行されたいわゆるキリシタン版といわれる

キリシタン関係銅版画

キリスト教の教義書や典礼書や諸学書などの書籍の中でタイトルページに入っている飾りの銅版画類で、師はその目録作成のためにアーネストサトウの七八八年刊の私家版「日本耶穌会刊行書志一五九一—一六一〇」、永山時英「吉利支丹史料集」昭和二年刊、増田廉吉編「長崎南蛮唐紅毛史蹟 第二輯」昭和四年刊の諸書を文献として引用している。

- 1 聖アンナと聖母子 一五九六 有家
- 2 アンティグワの聖母子 一五九七 ヴィーリックスにならって、有家で作られたものと推定される。
- 3 幼児イエズスと聖ヨゼフ
- 4 本の挿画として 殉教者のむれ  
復活したキリストの前のトマ  
地球をもつキリスト
- 5 書籍の扉 同 半身像  
シンボリックな図像

その他に一九三〇年ミヤマで発見された磔刑の木版画  
右のリストに対して今日の知識で直ぐ気の付くのは4の方が扉画としての銅版画であり、5は細かく内容を挙げていないが、挿画とすべきであろう。その他に、として挙げた磔刑の木版画としたのは誤りで実物は立体の木彫の磔刑像である。引用は一九三〇（昭和五）年四月三十日の大阪毎日新聞と Die Katholischen Missionen 58 (1930) 214 となっているが、前者の記事はマリア十五玄義国が原田辰次郎氏方の天井裏から発見されたことを報じたものであるが、その後半にその附近で大正九年（一九二〇）以来発見された遺品を列挙した中に「東藤次郎氏方から、シャビエルの像二枚および木彫の磔刑像一、下音羽の大神金次郎氏方から（象牙）磔刑像一つが発見されたが……」とあるものによっているが、木彫を木版画と取り違えたものであることが判る。

三五

挿図13 ヒデスの導師  
ライデン大学蔵（筆者撮影）

挿図14 どちりいな・きりしたん  
（東洋文庫 ロートグラフ本を反転し正常の状態にもどしたもの）

シュッテ師  
は右のシニールハンマー師のリストを再録し、さらに次のように書き加えた（『キリシタン研究 第七輯』昭和三十六年刊の「パレト写本中の銅版画」）。

地球を持つた救世主  
ヴァチカン図書館パルベリーニ

う表現をしているが、その個々については述べていない。<sup>註28</sup>  
両師の以上のリストには前述の伝来品と思われる「3 幼児キリストと聖ヨゼフ」を含んでいたり、「スピリツアル修行」の詳細を述べていない。また以上の中に含まれていない銅版画もある。そこで制作年代の明かなものもあるので、その順に整理し直し、現在の所蔵場所を明かにして列挙すれば次のようになる。

1 『パレト写本』 この写本の筆者はあでれマノエル・パレトの請願に一五九一年の年記あり。

救世主

縦一一・四横八・二センチ

十字架上のキリスト

縦 八・一横七・九センチ

聖母子

縦一二・四横八・一センチ

聖ペテロ（一五九〇の文字が彫ってある）

縦一一・三横七・三センチ

聖ヤコブ（正確な寸法は不明だが前者とはほぼ同じ大きさと思われる）<sup>註29</sup>

ヴァチカン図書館パルベリーニ文庫蔵

2 「サントスの御作業のうち抜き書」（4 殉教者のむれ）一五九一年加津佐刊

同一原版による二点<sup>註30</sup> オクスフォード大学ボードレイ図書館蔵

3 『ヒデスの導師』（II 復活したキリストの前のトマ）

一五九二年天草刊 扉画銅版画（挿図13） ライデン大学図書館蔵<sup>註31</sup>

4 『ドチリナ・キリシタン』（II 地球を持つキリスト全身立像）<sup>註32</sup>

一五九二年天草刊 扉画銅版画一点 東洋文庫蔵

扉ページ 縦一五横九・二センチ 銅版画 縦七・一横五・六センチ

5 『日本のことばとヒストリアを習ひ知らんと欲する人のために世話にやわらげたる平家の物語』（II シンボリックな図像）の扉画銅版画一点<sup>註33</sup>

一五九二年天草刊 ただし一九五三年天草刊の『イソホのファブラス』

『金句集』の二冊といっしょに合本してある。 大英博物館蔵

6 『どちりいな きりしたん』最初の紙葉の裏面にある銅版画（II シュッテ師

蒐集品中の一五九一年版「どちりいな」のタイトル・ページ  
○故幸田成友博士によると、一六〇七年版「スピリツアル修行」の二七章の前にも銅版画があったという。ラウレス師によれば、銅版画は三三枚で、一五枚はロザリヨのミステリヨ、十八枚は御受難の黙想の中にあつたという。初めの一五枚のうちの六枚は、長崎の大浦天主堂にあるこの唯一の有名な本の中に残っている。

そして以上のリストにさらに

○パレト写本にある五点が加わる。

とされている。マッコール氏は「現存する十四点のエングレーヴィング」とい



挙げた「地球を持った救世主」の半身像<sup>註34</sup> 一点(挿図14)

ヴァチカン図書館ベルベリーニ文庫蔵

刊年、刊行地とも不明(ローマ字本『ドチリナ キリシタン』に近い刊年と見なされている) 東洋文庫にロートグラフ本あり。

7 聖アンナと聖母子 有家 一五九六(註35) 一点 長崎大浦天主堂蔵

8 セビリアの聖母子 一五九七(註36) 一点 長崎大浦天主堂蔵

9 『スピリツアル修行のためにあつむるシユクワンのマニユアル』(地球を持つキリストの半身像)

一六〇七年長崎刊 扉画銅版画一点 長崎大浦天主堂蔵

同右書中の挿画銅版画六点

六頁裏 「受胎告知」 竪四・八二横三・九九センチ

十一頁表 「エリザベト訪問」 竪四・八五横三・七〇センチ

二二頁表 「聖殿内のキリスト」 竪四・八〇横三・九〇センチ

三二頁表 「鞭打たれる」 竪四・八五横三・八五センチ

六一頁裏 「昇天」 竪四・八〇横三・九〇センチ

七二頁裏 「聖母被昇天」 竪四・八〇横三・九〇センチ

水戸彰考館『西洋銅版画帖』の綴じ込みに「聖母被昇天」があることは前述した。したがってこの銅版画は同一のものが二点現存していることになる。

10 聖三位と聖家族 一点 東京国立博物館蔵

11 キリストの荅刑 聖牌に入れた銅版画 神戸市立南蛮美術館蔵

以上が日本人制作になる彫刻銅版画の全部であると考えられるものである。点数にすれば二三点であるが、2と9の挿画がそれぞれ同一原版からの刷りであるので二点ともいえる。右のうち6は写真版で紹介されたことが少なかったが、日本人制作の銅版画としては彫刻技法の優れたキリスト像といえる。

註

1 『西洋銅版画帖』をとりあげている諸論文には次のものがある。

J・F・シュツェ 「ヴァチカン図書館所蔵パレット写本について」『キリシタン研究第七輯』昭和三七所収

西村貞 『南蛮美術』昭和三三年、同 『日本初期洋風画の研究』昭和二〇年、同 『日本銅版画志』昭和十六年

『キリシタンの美術』昭和三六年、編集委員千沢楨治、西村貞、内山善一  
松田毅一 『キリシタン史実と美術』昭和四四年

海老沢有道 『日本歴史新書』『南蛮文化』昭和三三年

新村出 『吉利支丹叢書』解説 大正十五年一月 新村出選集第一巻所収

『西洋銅版画帖』「珍書大観 吉利支丹叢書」大阪毎日新聞社 昭和三年八月刊行  
複製本であるが、中の銅版画の大きさは原画通りの大きさではなく多少大きくなっているし、前後の白紙は省いてある。

2 拙稿「日本初期銅版画小史ならびに腐食銅版画家と蘭学者たちとの関係」緒方富雄編『蘭学と日本文化』昭和四六年所収

3 増田廉吉編『長崎南蛮唐紅毛史蹟第二輯』昭和四年

4 日本人制作の美術品を列挙されたシュールハンマー師が註を引用しているため、其の後シュツェ師、西村貞氏等は日本人の作品として扱っている。小野忠重氏「この頃西欧の彫刻金属凸版も伝わって」と述べているのはこれをさしたものでしょう(『江戸の洋画家』昭和四三年 十四頁)

5 新村氏は前掲解説に於て、彰考館にある写本は『立原翠軒自筆調査書』から抄写したもので誤写があるといわれたが、「珍書大観」中のコロタイプ版の同書と彰考館本とを比較してみたが誤写はなかった。

6 中森義宗訳編『キリスト教図像辞典』昭和四五年

7 BRYAN'S Dictionary of Painters and Engravers Vol. IV.

8 Hollstein, Dutch and Flemish engravings, etchings and woodcuts Vol. III.

9 James STRACHAN, Early Bible Illustration, 1957, Cambridge. p. 86.

10 前掲『キリシタン研究第七輯』一六、七頁および二七頁 註四三

11 新村出 前掲『吉利支丹叢書』解説、西村貞『日本初期洋画の研究』一八六頁

- 12 前掲『キリシタンの美術』五六頁「デウスの十誠」巻首の銅版画
- 13 永山時英編『増訂切支丹史料集』昭和二年「83生月島の吉利支丹遺物」として銅牌と絵像の写真、前掲『キリシタンの遺物』一九五頁「かくれキリシタン納戸神」の写真とそれを掲げ掲載。踏絵のレリーフの写真は『東京国立博物館図版目録 キリシタン関係遺物篇』14～18の五点
- 14 前掲『キリシタンの美術』一三三ページに「聖画入首飾」として扱っている。写真版は不明瞭ではあるがそれでも中の画像は「聖霊降臨」であることが判る。しかし説明では「聖母被昇天らしい」とし、「水戸藩のキリシタン百姓藤吉から押収したもの」としているが、藤吉の名は立原甚五郎の記録にはでてこない。
- 15 *excutit* の文字が使われたのは版画商、版画出版販売業が確立した一五二〇、三〇年代からであり、画家から買取った原画を版にしたり、版画家から原画を買取って多量に印刷して売ったりした。版画商は版画家でそれを兼ねることが多く、版画商はまた無名の彫版家を雇っていた。版画商自身が彫版する場合もあれば、雇ったサインを入れることを許されない無名の彫版者の仕上げのものもあった。A・M・ハインドは「一般に述語である *excutit* といった名前」は後者の場合と考えることを述べている。(A. M. HIND, *A History of Engraving & Etching from the 15th century to the Year 1914*, p. 119)。
- 16 『東京国立博物館図版目録キリシタン関係遺物篇』では画題は多少変っている。図版番号とここでの番号との関係は次の通り。1—50、2—47、3—63、4—62、5—45、6—49、7—56、8—64、9—55、10—46、11—48、12—52、13—61、14—58、15—57、16—51、17—60、18—59、19—54、20—53。
- 17 同書一二七～一二九頁の銅版画の目録では鐫者、画家の文字を使っている。「57 図中にCHの署名がある」「61 鐫者 N. de Mainho」はいずれも見誤まりである。
- 18 トマ・ド・ルーはフランドルの人で、アントウエルペン生れ。パリで死んだが、その生年は一五五九年とも六〇年ともいわれ、歿年は一六一一、二年とも一六二〇年とも諸書に書かれている。一五七六年にはジャン・ラベルの所で仕事をしている。その後シャルル五世の宮廷画家でフォンテンブローの装飾もしたアントワヌ・カロンの子となり、女婿となった。ヴァーリックスの細かな彫刻銅版画技法を学び、パリにその方法を導入した。五〇〇枚以上(五〇七とも五一二とも書かれている)の彫刻銅版画のうち二一三点(その数字の反対のならば方三一二点としたものもある)は肖像画であるが、その他の分のなかにイエズス会の布教宣伝のための宗教版画が多い。「マリアの生涯」の十八枚、「聖フランシスコの生涯」の二五枚の各シリーズなどがある。ルクレルク、名前はジャン Jean。ナンシイで生れ、同所で死んだ(一五八七—一六三三年)。フランスの画家、銅版画家で、発行人でもあった。ヴェネツィアのカルロ・サラチエノの弟子であった。彼はサン・マルクの騎士の位をうけたりもした。一六三二年ナンシイのイエズス会の聖堂に八枚の画を描いている。多くの聖堂の仕事をしたジャン・クザン原画のバイブルを一五九六年出版している。また木版も彫った。同じナンシイ出のジャック・カロの友人であった。
- 19 ニコラス・ド・マトニール 生歿年は判っていない。パリで一六一〇年から二〇年にかけて、版画家兼出版業を営んだ人で、宗教上の題材や遠近法の版画を彫刻した、という簡単なことしか判っていない。
- 20 L・ゴウルチェ、一五六一一年マイエンス生れ、一六四一年パリで死んだ。名前はレオナルド。デッサン家であり彫刻銅版画家でもあった。彼の画風はヴァーリックスやクリスパン・ド・パッサに似た大変細かなやり方の彫刻銅版画を九二四点も作っている。宗教、歴史、寓意、肖像等の画題で制作したが、本の扉画や装飾の銅版画も数多い。
- 21 P・フィレンス Pierre Fiens アントウエルペンに一五九七年生れ、パリで一六三六年頃死んだが、この両市で仕事をした。十七世紀の始め頃家族とパリに出てきた、フランドル派の彫刻銅版画家である。彼の版画作品では一六一〇年に刊行されたルイ十三世の肖像画が有名である。サン・ジャック通りの彼の住居に「凹版印刷教授・ピエール・フィレンスの店」と書いた看板を出し、印刷出版業も兼ねた。ブライアンの『画家版画家辞典』によれば、彼はサドレルの作品を生硬で不器用な画風で模倣したと指摘されているが、東京国立博物館の「童形キリスト」はそれほど硬く見えないうが、あるいはそれは原画のせいかも知れぬ。
- 22 B.H.の頭文字の彫版者については不明。
- 23 G (右側) H (左側) の組み合わせ。オランダのデッサン家で版画家であったウィレム・ホンディアス(またはホンド) HOND, Willem (or Hondius) のモノグラムと同じである。彼は一五九七年(六〇年ともいわれる)デン・ハーグ生れ、後年ダンチ

とに行き、そこでポーランドのラディスラウス四世の宮廷画家になった人で、一六五二年同地で死んだ。彼はラテン語で長いサインをすることもあったが、彼の彫刻銅版画にGとHを組み合わせたモノグラムを刻記している。彼の父も彫刻銅版画家で、ヘンドリック・ホンキヤノム HOND, Hendrik the elder という。またGとHが左右反対の組合わせになったものは有名な複製彫刻銅版画家のヘンドリック・ホルティアス GOLZIUS, Hendrik (一五五八—一六一六) が使っている。

24 同右 447—8, 448—5, 448—6 の三点。

25 A. M. HIND, An Introduction to A History of Woodcut p. 175. Dotted Prints and white-line metal-cut.

William M. IVINS, JR., How Prints Look. 3rd printing 1964, Boston. pp. 39—41.

William M. IVINS, JR., Notes on Prints p. 77, p. 15.

26 William M. IVINS, JR., Notes on Prints p. 15.

27 G. SCHURHAMMER S. J., Die Jesuitenmissionare des 16 und 17 Jahr hunderts und ihr Einfluss auf die Japanische Maleri (Jubilaisband, herausg. von der Deutschen Gesellschaft für Natur und Völkerkunde Ostasiens, Teil I, Tokyo 1933)

28 John E. McCALL, Early Jesuit Art in the Far East (Artibus Asiae Vol. X, No. 2-4, 1947) p. 128.

29 聖ヤロフ以外の四点の大きさは P. Joseph SCHÜTTE S. J. Christliche Japanische literatur, bilder und druckblätter in einem unbekanntem vatikanischen codex aus dem Jahr 1591 (Archivum Historicum Societatis Iesu. Vol. IX, Roma 1940) pp. 259—260.

30 E. Satow, The Jesuit Mission Press in Japan 1591-1610, London, 1888. 第一卷には飾り枠が印刷してあるが、第二巻にはない。二枚は同一原版によるものであることは明らかだが印刷の状態は多少異なる。飾り枠は6のどちらいなくきりしたと同一のユニット(活字と同じような凸版の装飾凸版の単位)を使っている。

31 Satow 前掲書 ただし同書の掲載図版が原物と甚だしく違うことを筆者はライデン大学図書館本を実見の結果、拙稿(註2)で指摘した。またこの銅版画は水戸『西洋銅版画帖』の XXXVIII の模刻であることはすでに明かにされているが、原画が現存

する唯一のものである。

32 日本人制作の銅版画の出来のよい方の一つであり、現品が日本にある為か諸書に紹介されることの最も多いものの一つでもある。図版、解説は『キリシタンの美術』『南蛮美術』平凡社「日本の美術19」昭和四〇年などに見られる。

33 E. Satow 前掲書など。西村貞氏はこれを「銅版風素画—おそらく銅版画の下絵かと思われるもの」と氏の著書『日本銅版画志』『日本初期洋風画の研究』『南蛮美術』に繰返し述べているが、複写した図版によってもその輪廓の向って左外側に黒い不定形の線の平行したものが見えるが、それは印刷の際にプレートマーク(銅版版の四周の縁)に付いたインクの拭き残しを示すものであるし、画面の線を仔細に見れば彫刻線であることが明かで、これは下画ではなく銅版画である。

34 図版で紹介されることの最も少なかったキリスト半身像であるが、アーチ状の構築物にその像が入っている形式は遺品の中では類例のないものである。周囲の文字は4のドチリナキリシタンのキリスト立像の下辺にある文字と同じである。

35 当時の銅版画の中で論及されることの多いもの一つ。年記場所が原版に彫刻したことが明らか(坂本満編『日本の美術No.80 初期洋風画』至文堂 昭和四五年)にされているが、この原版が輸入であるか否かは明かでない。この版の上部の免罪符を入れた開いた本の部分にオランダの作曲家ロルネリス・ベルドクノのモテット(四重唱歌)「マ・ベ・グラシア・プレナ」の楽譜を入れ、左右逆版の一五八四年アントウエルベン版マルテン・ド・フォス原画ヤン・サドレル彫版のものが最初であった。それはカソリック側において宗教銅版画の中に宗教音楽の楽譜を組み入れた最初の作品であった。(楽譜が銅版に彫られた最も早いものは一八五一年フィレンツェで作られている)

36 B. Laufer 1910, P. Pelliot 1921 の論文で言及され、西村貞氏がそれらを紹介、論述し、明末の『程氏墨苑』にこの銅版画が木版で模刻されていることで有名な作品。

37 挿画銅版画を貼りこむべき箇所には予め飾りの輪廓が印刷してあり、それは「ロザリオのミステリヨ」十五枚、「御受難の黙想」十八枚であるが、六点のほかに輪廓内に貼った痕のあるものは前者には八点認められるが、はたして三三点全部制作済みであったかどうかは判らない。